

☆「親なき後」を見据えて～障害者の自立～

西日本新聞連載 <https://www.nishinippon.co.jp/serialization/independent-living-for-severely-disabled-people/>

*「親亡き後」見据えて (8) 記者ノート

医ケア児の受け皿、地域で一步步 まず宿泊体験の機会から

西日本新聞 2021/9/9 <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/798070/>

> 連載「親亡き後見据えて」は、重い障害者を自宅で介護する親たちの高齢化が進むなか、いずれわが子を安心して託せる受け皿が地域社会にどれくらいあるのか、その「現在地」を見極める狙いがあった。

医療的ケア（医ケア）が必要な人の場合、現行制度では原則、医療職しか見守りができない。また他害や睡眠障害などの強度行動障害のある人は、親であっても、そばで支え続けるのは簡単ではない。

重度者4人が共同生活するシェアハウス「はたけのいえ」▽強度行動障害のある息子さんを18歳前に独り立ちさせた母親の試み。いずれも、わが子の将来について熟考を重ね、自ら障害福祉サービスの事業所を手掛け、ボランティアなどの力も借りて、現在進行形で模索している例だ。

裏返せば、国や自治体側が事実上、障害者が地域で自立して暮らしていく住まいの「第一候補」として想定するグループホーム（GH）への重度者の受け入れが、遅々として進まないことが背景にある。

福岡市は、今年策定した市保健福祉総合計画（2021～26年度）の中に、推進する施策の柱の一つとして「重度障がい」を掲げ、「GHへの重度障がい者の受け入れを促進する」と特記。これまでは「利用見込みに対し、不足していたGHの数自体を増やすことに注力してきた」（市障がい福祉課）という。将来、地域で自立を模索する重度者がどれくらいいるのか、具体的な規模の把握もこれからだ。

現在、重度者を受け入れているGHは、市から運営費の補助を受けてもなお赤字に苦しむ。一方、ヘルパーを長時間、利用しながら暮らす1人暮らしのニーズも増えている。さまざまな暮らしの選択肢を確保していくためにも、自治体にはスピード感ある施策の展開が望まれる。

◇ ◇

こうした地域社会の現状から、「ついのすみか」を一足飛びに見つけるのは現実的ではない。取材で印象的だったのは、親たちのそんな共通認識だった。

前段階として、拡充を求める声が大きかったのが短期入所。日常的な介護負担を軽減するレスパイトの観点だけでなく、わが子が、いずれ親元から離れる経験（宿泊体験）を積むことが可能だからだ。

連載に登場した福岡市の認定NPO法人「障がい者より良い暮らしネット」は6月、強度行動障害のある人や家族を対象に新たなアンケートを実施。市内在住の回答者の多くが、過去3カ月で利用できた短期入所の日数がゼロだったのに対し、北九州市の回答者のほとんどは「10～40日以上」と答え、利用環境に地域差があることが判明した。医ケアに対応できる事業所を含めて十分とは言えない。

「預け先がなくつらいと、悲鳴」を上げて、周りの誰も救いの手を差し伸べてくれなかった。そんなときにある事業所が短期入所を始めてくれた。涙が出るほどうれしかった。ある母親はしみじみ語った。

国は近年、重度者を受け入れるGHや短期入所施設への報酬を拡充している。

日ごろ利用し慣れた施設が、いつか暮らしの場になれば。そんな親たちの期待に応じてくれる事業所が一つでも増えてほしい。

◇ ◇

取材で最も印象に残ったのは、平日昼間の「はたけのいえ」の様子。家事を担当する近所のボランティア女性たちのもとを、ある利用者の母親がふらっと訪ねてきた。「久しぶり。元気してた？」…。穏やかな時間が流れていた。

時には「畑で採れた」という野菜を土産に持ってきたり、ティータイムを楽しんだり。障害のある人たちの住まいにとどまらず、気軽な「寄り合い所」として、地域に溶け込んでいる様子がうかがえた。

暮らしは、本人や家族、そして直接支援に当たる福祉や医療職だけでは成り立たない。住み慣れたまちで、遠巻きに眺めるわけではなく、さりげなくそばで気に掛けてくれる人がいれば、生きづらさを抱えている人やその家族にとって、どんなに安心だろう。

既にそうした「集落」が生まれつつあることが、何よりの発見だった。

（編集委員・三宅大介）

=おわり

保健福祉総合計画 福岡市の場合、保健や医療、福祉分野の基本理念と、取り組む施策の方向性を示す保健福祉行政のマスタープランとして、約5年おきに策定。法に基づいて市町村に策定が求められる地域福祉計画、障害者計画などを一体化した形となっている。今年8月に策定した計画は、約3人に1人が高齢者となるとみられる2040年を見据え「福祉が充実し、生活の質の高いまち」を実現する道筋を示したという。計画期間は21～26年度の6年間。近く市のホームページで全文を公開する方針。



近所のボランティアや利用者の母親、支援者らが気軽に立ち寄り、憩いの場、になっている「はたけのいえ」=7月、福岡市

…などと伝えています。